



1 軸組で街を見る

「駒沢公園の家」街の軸組模型, S=1:50, 桧角材

2 抽象的ではなく具体的な白

60種類の白のインスタレーション, S=フリー, アクリル塗料, メディウム, ジェッソ

3 装飾の機能 実践1: 群で全体の雰囲気が現れる

赤っぽい面, S=1:1, MDF, 着色撥水剤
赤っぽい群, S=1:1, 赤っぽい色のサンプル

4 いくつかの周縁でつくる

「OfficeT」カーテン, S=1:1, シルバー布 ※オンデルデリンデとの協働
「OfficeT」模型, S=1:30, スノーマット
「OfficeT」写真

5 サイトスペシフィックにカーテンを作る

「OfficeT」カーテン製作の記録, ムービー, 4分45秒

6 風景の来歴を積み重ねる

「鋸南の里山」俯瞰ドローイング, S=フリー, トレーシングペーパー重ね

7 装飾の機能 実践2: ばらばらな体験をつなぐ

「葉山の道」模型, S=1:50, スチレンボード
「葉山の道」外部階段の模型, S=1:12, アルミ板
「葉山の道」外部階段のスタディ, S=1:50, スノーマット

8 装飾の機能 実践3: 環境をチューニングする表面

木部の化粧, S=1:1, カーペット

0 はじめに

プリズミックギャラリーを「ある程度自由に」使い、展覧会を開催できることになった。もちろん、いくつかの条件もあり、そのひとつが来客用の打ち合わせスペースを確保することだった。外苑西通りに大きく開くこのスペースに展示空間と打合せスペースを同居させるという与件に向き合うことからはじめ、私たちは、いつもの設計スタンスで、展示作品・ギャラリー空間・打ち合わせスペース・外苑西通りの一角といった様々スケールの与件を、同時に解き、形づくることを目指した。展示作品は、S=1/50の建築模型やS=1/1のモックアップといった馴染みのあるものから、インスタレーションといったスケールフリーのもの、はたまた、空間のスケールだけでなく、ムービーといった時間の尺度を扱うものまで、様々なものを用いている。そして、今回扱っている実践も考察も、建築の小さな部分の仕上の気づきから、街や山といったスケールの話まで、様々である。一見バラバラに感じるかもしれないこれらの展示作品が一体的に群としてあるときの、ギャラリーを含めた環境全体で、何かが伝わることを願っている。

1 軸組で街を見る

「駒沢公園の家」は、細かく分けられた宅地に密集して木造家屋が建つ環境にある。最初は、サイディングやモルタルなど、色もテクスチャーもばらばらな取り留めのない風景だと感じていた。小さな木造住宅を二つに分割する案を考えているときに、ふと、周りの住宅も骨組みは同じだ、と思った。敷地境界が消滅して、くっついて建っている小さな木軸群を想像してみたら、ばらばらに見えていた住宅が、尺貫法というシンプルなルールを共有するひとつの群に、感じられた。そして、1軒の単位を超えて様々な環境へと再構築できる可能性のかたまりのように感じた。これは、その気分を鑑賞者と共有できたらと思い、作った街の軸組模型である。

2 抽象的ではなく具体的な白

「駒沢公園の家」の居間の天井は、白のペンキ仕上げである。しかし、最初は2階の床の下地の木の現しを予定していた。現場にいとどうも天井が重たく感じたので、フォトショップで検証し、白く塗ることにした。白い天井が現れたところで、ようやく違和感がとれたと感じた。そのときは、具体的過ぎた木目に対し、テクスチャーを抽象化することにより、上手く全体のバランスをとったと感じていたが、最近はこの仮定は少し違うのではないかと思っている。この白の体験は、きっと白の持つ明るさや広がりといった、もっと具体的な白の快適性に由来するのだと思う。そして、今までは日本塗料工業会のN95やN90を白として使っていたけれどよくよく見てみると世界は様々な具体的な「白」に溢れている。ペンキの白ですらものすごく沢山の種類があり、きっと各々に少しずつ違う機能があるのではないかと思う。これは、沢山の白の実践のインスタレーションである。

3 装飾の機能 実践1：群で全体の雰囲気が見れる

娘が遊園地に行きたいというので、西武園遊園地に連れて行った。建築家の池原義郎さんが手がけられたことはともかく、計画の詳細はよく知らないままに訪れておどろいた。細やかで贅沢なディテールがいるんなところに散りばめられていて、気分が高揚した。緑豊かな山の中にあることもあり全体像は掴みにくかったが、楽しい雰囲気と、あちこちの細やかなディテールが記憶に残った。この時の、全体構成を完全につかむ前に、沢山の具体的な体験の集合体として、建築を捉えた経験が「葉山の道」につながっている。このプロジェクトでは、様々なところで出会ういろんなテクスチャーの赤っぽい色の群が、建築の構成を雰囲気で理解できるように考えた。この展覧会では、「久我山の住宅」「鋸南の里山」「葉山の道」のスタディで使った赤っぽい色のサンプルを集めて、その赤っぽい群で、展示空間を区分する場をつくることを考えた。

4 いくつかの周縁でつくる

「OfficeT」は小さなシェアオフィスの内装計画で、目黒通り沿いのマンションのグランドレベルにある。30㎡ほどのスペースは三角形に近い台形の平面形状をしており、小さなスペースに振り合いに大きな開口部を3方向に持っていた。そこに、工務店と設計事務所の2つの会社のシェアオフィスが求められた。私たちは、2つの会社という区分よりは執務スペース、作業スペース、打ち合わせスペースといった行為の区分を優先し、空間を3つに分けることにした。小さな部屋をさらに小さく分けると、外部に対して内部の力が小さくなり、部屋同士のつながりよりも外部の道とつながりが強い、外部と一体的な周縁のファサード空間が現れ出ると考えた。そして、3つのファサード空間は、お互いにとっての奥の間という側面ももつ。ここには中心の間はない。それぞれの道と一体的な場所での仕事が、それぞれの道を行く人々との豊かな関係を築き、そしてその体験がダイレクトにシームレスに隣り合う部屋につながっている。仕事場で過ごすひとつつながりの時間が様々な場の質で彩られることを願っている。

5 サイトスペシフィックにカーテンを作る

「OfficeT」のカーテンは、カーテンデザイナーのオンデルデリンデと一緒につくった。オフィスの周縁のひとつであるミーティングスペースをファサード空間として立ち上げる為に、内部の仕切り壁こそが、いわゆるファサード壁だという認識でスタディを繰り返した。布に様々な加工を施す案や、強い色を使う案などいろいろと試してみて、お互いに可能性を感じたのが、表面素材で強度を出すのではなく、表面の「形」で強度を出すという案であった。布をかけた時にできたドレープの形が一番この場所に合うようにと、カーテンのデザインも、パターンの製作も縫製も、オンデルデリンデの工房ではなく、「この場所」で行った。「この場所」で作ったからこそできる形のカーテンは、緞帳のようなヒダに光を纏い、ミーティングスペースを特別な場所へと変えている。

6 風景の来歴を積み重ねる

「鋸南の里山」は、敷地1700坪の里山の古い民家の改修である。里山を引き継ぐとき、売主は家屋の設備などの説明と一緒に、一見すると緑一色の風景のそれぞれの場所についての性格や歴史を語った。おかげで私たちは、敷地環境を解像度高く捉えると同時に、この里山の来歴をも知ることとなった。大正時代から続いた農家の里山を1期工事、売主の35年間の週末住宅としての里山の改修を2期工事と捉えると、今回(3期)の改修は、里山の来歴のリレーとなると考えた。家屋の修繕と共に、里山と豊かに付き合うための「建築的な場」を広い敷地全体につくる。そして、それらをつなぐ「みち」をつくることで、全体として大きな環境をつくることを目指した。それは、「1軒の住宅ではなく、この環境全体を住処としたい」という施主の思いを形にしたものであった。将来、次の住み手が住み継ぐとき、より時間の蓄積が感じられる場所になっていれば良いと考えている。このドローイングでは、3期の風景の来歴を重ね、私たちの計画した時間を表現することを目指している。

7 装飾の機能 実践2：ばらばらな体験をつなぐ

「葉山の道」は築40年のRC3階建の住宅の改修計画である。既存住宅は町と山の間の、つづら折れの坂道の中腹に建つ。既存住宅は、「9本の壁柱で囲まれた空間と、その外側の縁側のような空間」という明快な平面計画で作られていたが、増改築により、その構成は体感できなくなっていた。私たちは、まず本来の魅力を取り戻すことにした。具体的には、壁柱に囲まれた空間を明るい色に仕上げ、縁側の空間を庭のレンガの近似色とすることで部屋と縁側、外部がグラデーショナルにつながることを期待している。一方で、この大きな住宅は、豊かな庭、緑溢れる裏山、眺望等ひとつひとつ素晴らしい環境にあるが、各々はお互いばらばらな状態にもあり、外部と住宅の内部をつなぐ計画だけでは、環境全体がつながるようには感じられないと思った。そこで、私たちは、つづら折れの山道の質を持つ階段を庭に形作ることで、庭を媒介に、山と家と町を繋ぎ、山も町も手に入れる体験をつくりだすことを考えた。色や階段という触媒をつくり、潜在的であった環境の関係性の再構築(ネットワーキング)をすることを目指している。このような環境の関係性のリノベーションが、豊かな暮らしにつながることを願っている。ここでは、計画全体の模型と、山道の質を持つ階段の部分模型、スタディ模型を展示する。スケールを横断しながら考えた、環境全体のリノベーションの経緯を提示したいと思う。

8 装飾の機能 実践3：環境をチューニングする表面

展示作品がない状態のプリズミックギャラリーを訪れたときに、白い壁と対比的な足場素材の木の壁が外苑西通りにちょうどよく存在している、と感じた。ところが、展示計画がある程度詰まったところで、ムービー用のベンチスペースを設計していると、小さく分けた空間には、この木の壁の存在感が強すぎることに気が付いた。多分、自然木表面の持つ情報量がこのスペースには多すぎるのだと思った。この木の壁の存在を大切にしながら、表面の情報量を操作できないかと考えた。テンポラリーに使う安価なカーペットを張ってみたけれどのっぺりとした単色では情報量が少なすぎた。裏面にしてみたら、ちょうど、木の積層のようなポーター柄と魅入りの表面が、少しお化粧をしたようにも見えてちょうど良いと感じた。

「化粧をする」という気づきにハッとした。装飾のひとつの機能だと思った。紅をひいた少女がふわりと艶やかに変わるように、表面の情報を操作して環境をチューニングすることで、現れでる佇まいがあると思う。